

訓経に非ざる「仮名書き法華経」について

——「翻訳仮名書き法華経」と「簡約仮名書き法華経」の存在——

野 澤 勝 夫

はじめに

本稿は「仮名書き」の語を冠して呼称される法華経に三種の別があることを資料を以て明らかにするものである。

「仮名書き法華経」の「仮名書き」とは本来、漢字・漢文書きのものを、仮名を交えて書くものの謂いであり、「仮名書き論語」「仮名書き日本書紀」などの例がある。わが国の經典のなかで仮名書きの遺品が伝わるものは、法華三部経と浄土三部経の一部（観無量寿経・阿弥陀経）^{注1}の範囲を出ない。これ等の經典が共にわが国に深く根をおろした一つの証拠である。なかでも法華経は、これを読み解いた跡を留めるいわゆる訓点の資料が三十余种に及び、貴重な国語資料として重視されてきた（浄土教典には古点資料の存在は知られていない）。

近來、国語史資料として注目されている「仮名書き法華経」はこの漢文原典の逐語的な訓読を仮名交じりの和文に延べ書きした「訓経」と呼ばれるものである。「訓経」は既に十世紀の後半に漢字・漢文に縁遠い女性の世界で成立していた。^{注2}

「仮名書き法華経」は經典の取意理解の域を超えて読誦（特に斉唱）のためのテキストとして作成され発展していった。中世の遺存資料の

なかには漢文經典の原表記を離れ、表音的な表記（字音語の仮名書きや同音異字の多用など）の目立つもののあることがこれを裏付ける。

漢文原典訓読の延べ書きにはじまり、同一内容が時代を隔てて書写されて成立した「仮名書き法華経」は——そこに含まれる言語事象が先行の「仮名書き法華経」を継承するものであるか、書写時の言語を反映するものであるかを吟味する必要があるが——国語史を通時的に觀察するに恰好な資料である。次節に見るように訓経の「仮名書き法華経」は資料も整備され、伝本の系統も三種に大別できることが明らかにされている。

現在、「仮名書き法華経」といえばこの「訓経」のことと理解されているのが一般である。しかし、法華経の仮名書き資料には「訓経」とは別の動機にもとづき、これとは別個、別種の仮名書きの法華経が作成されて存在したのである。このことは必ずしも明確に認識されるところとはなっていない。

以下にはまず、仮名書き法華経の通念となつてゐる漢文原典に依拠した「訓経」についてその遺存資料の大概を紹介する。次いで漢字・漢文に縁遠い女性のために完全なる和文の「翻訳仮名書き法華経」が存在したことを資料を以て示す。第三に經典内容を庶衆に解かり易く

知らしめることを目的とした絵巻のなかに「訓経」を改変、要約した「簡約仮名書き法華経」が詞書として用いられていることを示す。

最後にこれら三種の形態の異なる仮名書きの法華経が法華経信仰の盛んな時代における、それぞれ作成動機を異にした言語活動の所産であることを述べる。

一 いわゆる「仮名書き法華経」

いわゆる「仮名書き法華経」の遺品(鎌倉以前)で、現在、一品以上まとまって遺存が知られている資料としては次のものがある。

- ① 矢代本(写本、一帖。卷三の三品。故矢代仁兵衛氏蔵。現在、所在不明。兜木正亨『法華版経の研究』に一部翻字)
- ② 瑞光寺本仮名書き法華経(写本、九軸。卷六の四品、卷七の五品。京都深草、瑞光寺蔵。中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経研究篇』(佛之世界社・平成5)に影印・翻字。拙著^{注3)}に一部分翻字と紹介)
- ③ 天理図書館本仮名書き法華経(写本、卷三の三品。天理図書館蔵。「山辺道」26号に翻字・解題。中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経』(研究篇)(佛之世界社・平成5)に翻字・解題)
- ④ 妙一記念館本仮名書き法華経(写本、全八帖。妙一記念館所蔵。中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華経』(影印篇上下)(翻字篇)(研究篇)(佛之世界社・昭和63・平成5)に翻字・解題・研究)
- ⑤ 足利本仮名書き法華経(写本、全八軸(一部闕失)。足利市、鍬阿寺蔵。中田祝夫編『足利本仮名書き法華経』(影印篇)(翻字篇)(勉誠社・昭和49・51)に所収)
- ⑥ 守屋本仮名書き法華経(写本。陀羅尼品・勧発品の二品。京都国立博物館蔵)

江戸時代以降の法華経の訓読については、中世のものより直説的であり和文的でないことを兜木正亨氏がしばしば指摘している。国語資料としての意味も自ずから異なるものであるから、ここでは省略する。^{注4)}

さらに仮名書き法華経の遺品には「仮名法華経切れ」として鎌倉時代の能書に仮託、擬定された古筆(断簡)が古筆手鑑の類に収められて伝存するものがある。また、逸文として残存するものがあり、絵巻の詞書としても伝わるものがある。次にこれらを列挙する。

- ① 仮名法華経切れ(諸家蔵の平安末期・鎌倉時代の断簡各種。小松茂美編『古筆学大成25』(講談社・一九九三)に八種集録)
- ② 唐招提寺蔵断簡(版経。卷三葉草喩品の二葉。中田祝夫編『妙一本仮名書き法華経』(研究篇)(佛之世界社・平成5)に写真所掲)
- ③ 法印本(版経の逸文。日遠『法華譯和尋跡抄』所引)
- ④ 定家本(版経の逸文。日遠『法華譯和尋跡抄』所引)
- ⑤ 法華経絵巻の詞書(小松茂美編『阿字絵巻・華嚴五十五所絵巻・法華経絵巻』(続日本絵巻大成10)(中央公論社・昭和59)等に所収)

右のうち、①に所収の二種の残簡および⑤の「絵巻の詞書」は漢文原典訓読の延べ書きとは認められず、「訓経」に非ざる「仮名書き法華経」として認識されるべきものである。

二 「翻訳仮名書き法華経」の存在


小松茂美編『古筆学大成25』(講談社・一九九三)には「仮名法華経切れ」八種、三六葉が集録されている。その所収資料の一覧を、書写年代・書写者についての編者の解説(要約)を添えて示す。

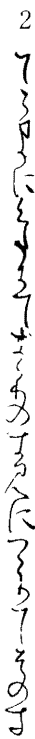




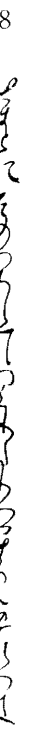

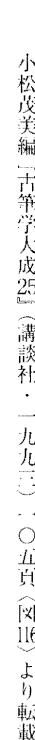
「仮名書き法華経切れ」(小松茂美編『古筆学大成25』所収)

- 〔一〕 伝西行筆「仮名書き法華経切れ」(化城喻品一葉)
西行以前、12世紀初頭の女性能書か
 - 〔二〕 伝後京極良経筆「仮名書き法華経切れ」(序品八葉)
13世紀初頭、後京極流の書風
 - 〔三〕 伝慈円筆「仮名書き法華経切れ一」(葉草喻品他、一二葉)
13世紀初頭、慈円時代の書風の寄合書き
 - 〔四〕 伝慈円筆「仮名書き法華経切れ二」(譬喻品一葉)
13世紀初頭、慈円ではないが慈円様式
 - 〔五〕 伝藤原家隆筆「仮名書き法華経切れ一」(譬喻品、化城喻品各一葉)
13世紀半ば過ぎ、家隆筆は根拠がない
 - 〔六〕 伝藤原家隆筆「仮名書き法華経切れ二」(法師功德品一葉)
13世紀半ば前後、家隆筆は擬定
 - 〔七〕 伝世尊寺行尹隆筆「仮名書き法華経切れ」(方便品一〇葉)
14世紀初頭、行尹と同時代の書風
 - 〔八〕 伝世尊寺行俊隆筆「仮名書き法華経切れ」(観世音菩薩普門品一葉)
15世紀、行俊の筆跡は確かめる術がない
- 「法華経切れ」はもとより断片的な資料に過ぎないが、既に知られている仮名書き法華経を補うものがある。しかし、最も注目されることは訓経に非ざる、殆どすべて和語を用いた「翻訳法華経」の残簡が存在することである。

右のうち、逐語的な訓読の延書きには非ずして翻訳經典と認められる(二)(六)の二点を《資料A》《資料B》として、次に提示、紹介する。

《資料A》 伝西行筆「仮名書き法華経切れ」(一葉)

1. 

2. 
 3. 
 4. 
 5. 
 6. 
 7. 
 8. 
 9. 

小松茂美編『古筆学大成25』(講談社・一九九三)一〇五頁(図16)より転載

右は古筆の図録『養老』(昭和二十七年五月刊)に収録されたもので右端の上下にかがり穴の痕跡が見え、もとは綴葉装の冊子本であったという。西行筆と伝称されているが、編者の小松茂美博士によれば、流麗典雅な書風はさらに時代を遡り、12世紀初頭の女性能書によって書写されたものかという。さらに、編者は「現存最古の仮名法華経断簡なるがゆえに、当時の『法華経』の和文体の傾向を推知する上に、きわめて重要な資料で、その価値は見逃しがたい」と述べる。¹⁵⁾

しかし、まずこの一片の残簡は国語史の観点から訓読に基づくいわゆる「仮名書き法華経」に對置して理解されるべき貴重な資料である。即ち、次掲の《資料B》とともに「訓経」とは全く別種、別個な達意の和文法華経が存在したことを示すものである。また、一経典が訓読を越えて「翻訳經典」として存在したことを示す重大な資料である。

以下に原姿と同じ行取りで翻字し、下段には代表的な訓読の延書きである「妙一本仮名書き法華経」の対応する部分を配して示す。後に漢文原典を添える。末尾に〈比較・検討〉の項を設けて後考に備える。

〈翻字〉

1. かのよのなかにあるところの□□を、みな、からとりあつめてこまかにくたきて、すゝりのすみにつくりて、そのす
2. みをすりて、ひむかしさま二千のくにをすきて、ひ
3. とつのしるしをつけてむとす。そのしるしのおほきさひ(と?)
4. のあしのかげにまかひてみゆるちりひとつかおほきさ
5. なり又千のくにをすきて又ひとつのしるしをつ
6. くかくのこつく千のくにをすきつゝ、しるしをつ
7. □むほとにそのつちしてつくりたりつるすみなつき
8. はてなむほと、いかばかりありなむとおまへにさふらふ人々
- 9.

〔漢文原典〕

譬如三千大千世界所有地種假使有人／磨以爲墨／過於東方千國土墨／於汝等意云何……（岩波文庫『法華經・中』一〇頁）

妙一本 四三九・4・四四〇・5 注6
 三千大千世界の所有の地種を、たとひひとありて、
 割して、もて、すみとなして、
 東方千の国土をすきて、いまし一
 點をくたさん。おほきさ
 塵のこと
 し。また千の国土をすきて、また一點をく
 さん。かくのこくとく、展転して、
 種の墨をつくさん
 ことき、なんとちかこころにおきて、いかん
 乃下一／點 大／如微塵 又過千國土 復下一／點

（卷第三・化城喻品七）

〈比較・検討〉

1. かのよのなかにあるとこ□□の□□……三千大千世界の所有の地種
2. こまかにくたきて、すゝりのすみにつくりて……磨して、もて、すみとなして

3. ひむかしさま……東方

くに……国土

ひとつのしるしをつけてむとす……一点をくたさん

4. そのしるしのおほきさひ(と)のあしのかげにまかひてみゆるちり

ひとつかおほきさなり……おほきさ微塵のことし（ちり……微塵）

6. ひとつのしるしをつく……一点をくたさん

7. 千のくにをすきつゝ、しるしをつく□むほとに……展転して

8. そのつちしてつくりたりつるすみ……地種の墨

9. おまへにさふらふ人々……なんたち

《資料B》 伝藤原家隆筆「仮名書き法華經切れ 二」（二葉）

- 1 三志太のまゝに、
2 一のまゝに、
3 二のまゝに、
4 三のまゝに、
5 四のまゝに、
6 五のまゝに、
7 六のまゝに、
8 七のまゝに、
9 八のまゝに、
10 九のまゝに、
11 十のまゝに、
12 十一のまゝに、
13 十二のまゝに、
14 十三のまゝに、
15 十四のまゝに、
16 十五のまゝに、
17 十六のまゝに、
18 十七のまゝに、
19 十八のまゝに、
20 十九のまゝに、
21 二十のまゝに、
22 二十一のまゝに、
23 二十二のまゝに、
24 二十三のまゝに、
25 二十四のまゝに、
26 二十五のまゝに、
27 二十六のまゝに、
28 二十七のまゝに、
29 二十八のまゝに、
30 二十九のまゝに、
31 三十のまゝに、
32 三十一のまゝに、
33 三十二のまゝに、
34 三十三のまゝに、
35 三十四のまゝに、
36 三十五のまゝに、
37 三十六のまゝに、
38 三十七のまゝに、
39 三十八のまゝに、
40 三十九のまゝに、
41 四十のまゝに、
42 四十一のまゝに、
43 四十二のまゝに、
44 四十三のまゝに、
45 四十四のまゝに、
46 四十五のまゝに、
47 四十六のまゝに、
48 四十七のまゝに、
49 四十八のまゝに、
50 四十九のまゝに、
51 五十のまゝに、
52 五十一のまゝに、
53 五十二のまゝに、
54 五十三のまゝに、
55 五十四のまゝに、
56 五十五のまゝに、
57 五十六のまゝに、
58 五十七のまゝに、
59 五十八のまゝに、
60 五十九のまゝに、
61 六十のまゝに、
62 六十一のまゝに、
63 六十二のまゝに、
64 六十三のまゝに、
65 六十四のまゝに、
66 六十五のまゝに、
67 六十六のまゝに、
68 六十七のまゝに、
69 六十八のまゝに、
70 六十九のまゝに、
71 七十のまゝに、
72 七十一のまゝに、
73 七十二のまゝに、
74 七十三のまゝに、
75 七十四のまゝに、
76 七十五のまゝに、
77 七十六のまゝに、
78 七十七のまゝに、
79 七十八のまゝに、
80 七十九のまゝに、
81 八十のまゝに、
82 八十一のまゝに、
83 八十二のまゝに、
84 八十三のまゝに、
85 八十四のまゝに、
86 八十五のまゝに、
87 八十六のまゝに、
88 八十七のまゝに、
89 八十八のまゝに、
90 八十九のまゝに、
91 九十のまゝに、
92 九十一のまゝに、
93 九十二のまゝに、
94 九十三のまゝに、
95 九十四のまゝに、
96 九十五のまゝに、
97 九十六のまゝに、
98 九十七のまゝに、
99 九十八のまゝに、
100 九十九のまゝに、
101 百のまゝに、
102 百一のまゝに、
103 百二のまゝに、
104 百三のまゝに、
105 百四のまゝに、
106 百五のまゝに、
107 百六のまゝに、
108 百七のまゝに、
109 百八のまゝに、
110 百九のまゝに、
111 百十のまゝに、
112 百十一のまゝに、
113 百十二のまゝに、
114 百十三のまゝに、
115 百十四のまゝに、
116 百十五のまゝに、
117 百十六のまゝに、
118 百十七のまゝに、
119 百十八のまゝに、
120 百十九のまゝに、
121 百二十のまゝに、
122 百二十一のまゝに、
123 百二十二のまゝに、
124 百二十三のまゝに、
125 百二十四のまゝに、
126 百二十五のまゝに、
127 百二十六のまゝに、
128 百二十七のまゝに、
129 百二十八のまゝに、
130 百二十九のまゝに、
131 百三十のまゝに、
132 百三十一のまゝに、
133 百三十二のまゝに、
134 百三十三のまゝに、
135 百三十四のまゝに、
136 百三十五のまゝに、
137 百三十六のまゝに、
138 百三十七のまゝに、
139 百三十八のまゝに、
140 百三十九のまゝに、
141 百四十のまゝに、
142 百四十一のまゝに、
143 百四十二のまゝに、
144 百四十三のまゝに、
145 百四十四のまゝに、
146 百四十五のまゝに、
147 百四十六のまゝに、
148 百四十七のまゝに、
149 百四十八のまゝに、
150 百四十九のまゝに、
151 百五十のまゝに、
152 百五十一のまゝに、
153 百五十二のまゝに、
154 百五十三のまゝに、
155 百五十四のまゝに、
156 百五十五のまゝに、
157 百五十六のまゝに、
158 百五十七のまゝに、
159 百五十八のまゝに、
160 百五十九のまゝに、
161 百六十のまゝに、
162 百六十一のまゝに、
163 百六十二のまゝに、
164 百六十三のまゝに、
165 百六十四のまゝに、
166 百六十五のまゝに、
167 百六十六のまゝに、
168 百六十七のまゝに、
169 百六十八のまゝに、
170 百六十九のまゝに、
171 百七十のまゝに、
172 百七十一のまゝに、
173 百七十二のまゝに、
174 百七十三のまゝに、
175 百七十四のまゝに、
176 百七十五のまゝに、
177 百七十六のまゝに、
178 百七十七のまゝに、
179 百七十八のまゝに、
180 百七十九のまゝに、
181 百八十のまゝに、
182 百八十一のまゝに、
183 百八十二のまゝに、
184 百八十三のまゝに、
185 百八十四のまゝに、
186 百八十五のまゝに、
187 百八十六のまゝに、
188 百八十七のまゝに、
189 百八十八のまゝに、
190 百八十九のまゝに、
191 百九十のまゝに、
192 百九十一のまゝに、
193 百九十二のまゝに、
194 百九十三のまゝに、
195 百九十四のまゝに、
196 百九十五のまゝに、
197 百九十六のまゝに、
198 百九十七のまゝに、
199 百九十八のまゝに、
200 百九十九のまゝに、
201 二百のまゝに、
202 二百一のまゝに、
203 二百二のまゝに、
204 二百三のまゝに、
205 二百四のまゝに、
206 二百五のまゝに、
207 二百六のまゝに、
208 二百七のまゝに、
209 二百八のまゝに、
210 二百九のまゝに、
211 二百十のまゝに、
212 二百十一のまゝに、
213 二百十二のまゝに、
214 二百十三のまゝに、
215 二百十四のまゝに、
216 二百十五のまゝに、
217 二百十六のまゝに、
218 二百十七のまゝに、
219 二百十八のまゝに、
220 二百十九のまゝに、
221 二百二十のまゝに、
222 二百二十一のまゝに、
223 二百二十二のまゝに、
224 二百二十三のまゝに、
225 二百二十四のまゝに、
226 二百二十五のまゝに、
227 二百二十六のまゝに、
228 二百二十七のまゝに、
229 二百二十八のまゝに、
230 二百二十九のまゝに、
231 二百三十のまゝに、
232 二百三十一のまゝに、
233 二百三十二のまゝに、
234 二百三十三のまゝに、
235 二百三十四のまゝに、
236 二百三十五のまゝに、
237 二百三十六のまゝに、
238 二百三十七のまゝに、
239 二百三十八のまゝに、
240 二百三十九のまゝに、
241 二百四十のまゝに、
242 二百四十一のまゝに、
243 二百四十二のまゝに、
244 二百四十三のまゝに、
245 二百四十四のまゝに、
246 二百四十五のまゝに、
247 二百四十六のまゝに、
248 二百四十七のまゝに、
249 二百四十八のまゝに、
250 二百四十九のまゝに、
251 二百五十のまゝに、
252 二百五十一のまゝに、
253 二百五十二のまゝに、
254 二百五十三のまゝに、
255 二百五十四のまゝに、
256 二百五十五のまゝに、
257 二百五十六のまゝに、
258 二百五十七のまゝに、
259 二百五十八のまゝに、
260 二百五十九のまゝに、
261 二百六十のまゝに、
262 二百六十一のまゝに、
263 二百六十二のまゝに、
264 二百六十三のまゝに、
265 二百六十四のまゝに、
266 二百六十五のまゝに、
267 二百六十六のまゝに、
268 二百六十七のまゝに、
269 二百六十八のまゝに、
270 二百六十九のまゝに、
271 二百七十のまゝに、
272 二百七十一のまゝに、
273 二百七十二のまゝに、
274 二百七十三のまゝに、
275 二百七十四のまゝに、
276 二百七十五のまゝに、
277

小松茂美編『古筆学大成25』（講談社・一九九三）一一五頁（図139）より転載

右は弥彦神社（越後国一の宮）蔵の古筆手鑑「見ぬ世の友」に所収の一葉で、極札は「從二位家隆卿」とするが擬定にすぎず、書風から推して十三世紀半ば前後の書写かという。さらに編者、小松茂美博士は次のように述べて一部十巻本の翻訳仮名法華経の存在した可能性をも示唆している。

この部分を、岩波文庫『法華経』下に比較してみると、必ずしも経句の本文によらず、和文化している。しかも、それに際しては

大胆に意識する姿勢が見える。当時の仮名法華経は、本文を忠実に訓読する訓経と、このような意識による和文化的の本が通行していたことを知る。むしろ、後者が当時の女性には手近なものとして、歓迎されていたのではなかったか。もとは『法華経』八巻、あるいは開結の二経を添えた一部十巻本ではなかったか。^{〔注6〕}
以下に《資料A》と同様に翻字し、下段には「妙一本」を配して示す。後に漢文原典を添える。

《翻字》

1. もししたのさきらをもてろく／＼の人のなかにし
2. てのりをのへとくことあらはそのこゑたへにめてた
3. くしてきかむ人をしてよろこひさかへしめむ又も
4. ろく／＼の天し天女このたへなるこゑのゝりをのへと
5. く事はをきゝてみなことく／＼きたりてきかむ
6. またれいの人にはあらずしてさまともことなる女

《漢文原典》

若以舌根 於大衆中／有所演説 出深妙聲 能入其心／皆令歡喜快樂
悉來聽／及諸龍 龍女 夜叉 夜叉女 ……（岩波文庫『法華経・下』二二二頁）

《妙一本 一〇四六・三―一〇四七・五》
もし舌根をもて、大衆のなかにして演説するところあらは、深妙のこゑをいたして、よくそのころにいて、みな歡喜快樂せしめん。また、もろもろの天子・天女・釈帝・諸天、この深妙の音声の演説するところある言論の次第をききて、みなことくきたりてきかん。およひもろもろの竜・竜女・夜叉・夜叉女 （卷六・法師功德品第十九）

《比較・検討》

1. したのさきら……舌根
1. もろく／＼の人……大衆
2. のりをのへとく……演説する
2. そのこゑたへにめてたくして……深妙のこゑをいたして
3. きかむ人をしてよろこひさかへしめむ……みな歡喜快樂せしめん
4. たへなるこゑ……深妙の音声
5. 事は……言論の次第

6. またれいの人にはあらずしてさまともことなる女……およひもろもろの竜・竜女・夜叉・夜叉女

三 「簡約仮名書き法華経」の存在

逐語的な訓経に非ざる「仮名書き法華経」のもう一つの姿を絵巻の詞書きにみるができる。

宗教を背景としてつくられた絵巻には、寺院・神社の創設の由来や

本尊である神仏の靈驗譚を扱った「縁起絵巻」、次いで宗派や寺院を興して祖師と仰がれる高僧の行状を描いた「高僧伝絵巻」がある。これらは寺社の興隆や宗派の拡大という目的で作制され、さらに模本作制されたという事情とによって伝存する遺品の数が多く、今日の絵巻の遺品の大半を占めるという。^{〔注7〕}これらとは別にそのいずれにも属さず、經典や經說そのものを題材とした、いわば「經典絵巻」とも称すべきものがある。絵画的イメージを援用して經典の大意を伝え教えることを目的としたもので、六道絵の一つの『地獄草紙』がよく知られている。『法華經絵巻』も同種、同類のものである。「前文後図」の形式の仮名文の詞書を持ち成立した時代も近い。『法華經絵巻』は『日本古典文学大辞典』(岩波書店)によれば、次のように説明されている。

法華經絵巻 三巻。絵巻。鎌倉時代前期成立。『法華經』を和訳してそれに絵をつけたもの。原初は恐らく八巻であったと考えられるが、現在は「神力品第二十一」と「囑累品第二十二」の二品分が、畠山美術館・香雪美術館・上野家の三か所に分蔵されている。両品とも二段で完結している。(内容)「神力品」前段は欠き、絵(畠山美術館蔵)は多宝・釈迦二仏並座する多宝塔が僧俗にかこまれて雲上に出現し仏身から放光して全仏国土を照らす図。後段(詞は畠山美術館蔵、絵は香雪美術館蔵)は經典にある山野の起塔図。「囑累品」前段(詞は畠山美術館蔵、絵は上野家蔵)は釈迦が諸菩薩の頭をなでて法を付与する図。後段(詞は香雪美術館蔵、絵は畠山美術館蔵)は多宝塔に参集した分身諸仏が多宝如来が帰還したので本国に帰る図。建長六(一二五四)年の『繪因果經』に近い画風で、制作もこの頃と考えられる。〔宮 次男〕

右の説明にも見られるように、この絵巻は「前文後図」式の詞書と画面とが紙継ぎの順序を誤って錯簡を生じたまま分蔵されてきたものである。その原初の姿は次のようであったと考えられている。^{〔注8〕}

〔如来神力品第二十一〕

前段 詞 (欠失)

絵 畠山本第一段

〔囑累品第二十二〕

前段 詞 畠山本第二段

絵 上野本

後段 詞 畠山本第一段

絵 香雪本(村山本)

後段 詞 香雪本(村山本)

絵 畠山本第二段

この絵巻は現在、次の絵巻集成シリーズ、および図録に収められた三種の複製によって容易に見ることができる。今回の考察もこれらに基づいた(なお、絵巻には「図中挿文」式に短冊形の詞書二種)も認められるが、本稿では「前文後図」式の長大な詞書に限って考察の対象とした)。

- ①小松茂美編『華嚴五十五所絵巻・法華經絵巻・觀音經絵巻・十二因縁絵巻(新修日本絵巻物全集第25巻)』(角川書店・昭和54年)
- ②小松茂美編『阿字經絵巻・華嚴五十五所絵巻・法華經絵巻(続日本絵巻大成10)』(中央公論社・昭和59年)
- ③奈良国立博物館編『仏教説話と美術』(思文閣・平成8年)

次にその原姿(コピー)を掲出する。

〈原姿〉

- 1 如来時下佛つるくをくもて疾我より
- 2 神力なり元重は誠切付添えんくは
- 3 此乃切法なりとも相けくも事あり
- 4 一重なりてこれなり。如来は
- 5 一切の所の法なる一切の神力なり
- 6 一切の法なり。如来一切の法なり

7 いほよふもあつては行ふてあへん可なりといふ
 8 乃うら若うへ来れり若く信あつて自
 9 れ家あて殿堂より山谷暇野なりとも
 10 され終をまては終すへ——これ亦
 11 通端より法依こころ小なり可稱善哉得
 12 くる小いはい轉は轉れこころは佛あ
 13 へんくは轉と轉は依こころ小なりは轉
 14 一孤りゆなり
 15 妙法蓮華經講果第二十二
 16 これ亦乃こころは轉は轉れこころは佛あ
 17 大神力現る右れ法をとりてきき
 18 け并摩訶薩は頂をなぐりてをゆるし
 19 出をき百千万億阿僧祇劫これこころ
 20 可稱善哉二衆三善提乃法をとりてい
 21 けりてきんくは轉は轉れこころは佛あ
 22 へんくは轉と轉は依こころ小なりは轉
 23 利養す——かくれこころは轉は轉れ
 24 け并摩訶薩は頂をなぐりてをゆるし
 25 なるくいこころは轉は轉れこころは佛あ
 26 知てこれこころは轉は轉れこころは佛あ

27 法をとりては轉は轉れこころは佛あ
 28 なるくいこころは轉は轉れこころは佛あ
 29 け并摩訶薩は頂をなぐりてをゆるし
 30 出をき百千万億阿僧祇劫これこころ
 31 可稱善哉二衆三善提乃法をとりてい
 32 けりてきんくは轉は轉れこころは佛あ
 33 へんくは轉と轉は依こころ小なりは轉
 34 利養す——かくれこころは轉は轉れ
 35 け并摩訶薩は頂をなぐりてをゆるし
 36 なるくいこころは轉は轉れこころは佛あ
 37 知てこれこころは轉は轉れこころは佛あ
 38 出をき百千万億阿僧祇劫これこころ
 39 可稱善哉二衆三善提乃法をとりてい
 40 けりてきんくは轉は轉れこころは佛あ
 41 へんくは轉と轉は依こころ小なりは轉
 42 利養す——かくれこころは轉は轉れ
 43 け并摩訶薩は頂をなぐりてをゆるし
 44 なるくいこころは轉は轉れこころは佛あ
 45 知てこれこころは轉は轉れこころは佛あ

46 けけけ、おれをさうてくれ大は惣
47 しつても、さういふ事をしてくれ
48 くれ、おれはさういふ事をして
49 くれ、さういふ事をしてくれ
50 くれ、さういふ事をしてくれ
51 くれ、さういふ事をしてくれ
52 くれ、さういふ事をしてくれ
53 くれ、さういふ事をしてくれ
54 くれ、さういふ事をしてくれ
55 時、釋迦牟尼佛十方よりきて、
56 諸乃今、おれ佛を、さういふ事
57 し、さういふ事をしてくれ
58 くれ、さういふ事をしてくれ
59 くれ、さういふ事をしてくれ
60 くれ、さういふ事をしてくれ

61 の法は、實に、おれ佛の、
62 法は、實に、おれ佛の、
63 法は、實に、おれ佛の、
64 法は、實に、おれ佛の、
65 法は、實に、おれ佛の、

小松茂美編『阿字経絵巻・華嚴五十五所絵巻・法華経絵巻(続日本絵巻大成10)』
(中央公論社・昭和59年)七六頁、八〇〇八二頁、八五〇八六頁より転載

現存の『法華経絵巻』はこの一種のみであり、その詞書は延べ65行に留まり、語彙・語法を論ずるには十分な分量とはいえない。しかしこの詞書はいわゆる「仮名書き法華経」についての通念を改めさせる重要な資料であると思われる。

まず、この詞書の大きな特徴は経文に甚だしく則したものとなっていることである。試みに、同様に長大な仮名書きの詞書をもつ『地獄草紙』と比較してみたい。『地獄草紙』(東京国立博物館蔵)の第一段は叫喚地獄のうち髪火流を表し、所依の經典は『正法念処經』とされる。次にその該当部分を(対応する語句に傍線を施して)下段に示す。見られるように、詞書は原典経文の摘訳とも云うべく、大意を取意し要約したものとなっている。

また この地獄に別所あり なをば
髪火流といふ このところの衆生 むかし
人間にありて 殺生偷盜邪淫 およびま
た 五戒をたもちたるひとのまへに
して さけをのむはめでたき戒なり

復有異處 名髪火流 是彼地獄第三別處
衆生何業生於 彼處彼見有人 殺生偷盜
邪行飲酒樂行多作 彼人則墮叫喚地獄髮
火流處 殺盜邪行業及果報 如前所說
何者飲酒 於優婆塞五戒人邊 說酒功德

といひて さけをあたへて戒をやぶらしめたりしもの この地獄におつこのぢごくは 熱鐵のいぬ つみ人のあしをくらふ あるいはまた ほのをのくちばしあるくろがねのわし 罪人のかうべをつきわりて そのなづきをすいとる 苦患たふべからず さけぶこゑつきず

作如是言 酒亦是戒 令其飲酒 彼人以是惡業因縁 身壞命終 墮於惡處 叫喚地獄髮火流處 受大苦惱 所謂雨火 彼地獄常被燒煮 炎燃頭髮 乃至脚足有熱鐵狗 瞰食其足 炎嚼鐵驚 破其髑髏而飲其腦 熱鐵野干食其身中 如是常燒如是常食 彼人自作不善惡業 悲苦號哭
〔大正新修大藏經〕一七・四〇c(四一a)

奈良国立博物館編『仏教説話と美術』(思文閣・平成8年(一九九六)による。

これに対して『法華經繪卷』の詞書は文脈・語句の細部に至るまで則經文性が極めて強い。この点については既に注意され、夙に知られていた「足利(錢阿寺)本仮名書き法華經」―元徳二(一三三〇)年の識語あり。分別功德品、神力品は欠、囑累品は大東急記念文庫蔵―との対比を試みたものがある。^{注9)}それによれば、「本繪卷は仏典である法華經を和訳して詞書にしたきわめて特異な繪卷である」としている

が、本稿では「足利本」の祖形と目される「妙一本仮名書き法華經」(鎌倉時代前期成立)と比較・対照して異同を検討する。
次に詞書を同じ行取りで翻字し、下段には対応する「妙一本」の本文を(詞書で省略された部分に括弧を施して)示す。後に漢文原典を添える。

〈翻字〉

〔如来神力品第二十〕 〔畠山記念館蔵〕

- 1 その時に仏つけてのたまはく若我この
- 2 神力をもて无量阿僧祇劫付嘱せんかために
- 3 此經の功德をとくとも猶つくす事あた
- 4 はし要をとりてこれをいふに如来の
- 5 一切の所有の法如来の一切自在神力如来の
- 6 一切の秘藏のくら如来一切の甚深の事みな
- 7 此經にときあらはす經卷のあらん所もしはその

〔妙一本 一一二・二一一・一六・三〕

- (上行等の菩薩大衆に)つけたまはく、(諸仏の神力は、かくのこく、無量無辺不可思議なり。)もし、われ、この
神力をもて、無量(無辺百千万)阿僧祇劫(にをきて)囑累のためのゆへに、
この經の功德をとくとも、なほ、つくすことあたはし。要をもてこれをいはは、如来の
一切の所有の法、如来の一切の自在神力、如来の
一切の秘藏の蔵、如来の一切の甚深の事(をは)、みな
この經に(をきて)、宣示顯説し(たまふ。このゆへになんたち、如来滅後に、まさ

8 のうち若はうへ木のもと若は僧房若は白衣

9 の家若は殿堂もしは山谷曠野なりとも
10 みな塔をたて、供養すへしこの所は

11 道場なり諸仏こ、にして阿耨菩提を得
12 たまふ此所は転法輪のころ也諸仏こ、
13 にして法輪を転し諸仏こ、にして涅槃
14 し給かゆへなり

妙法蓮華經囑累品第二十一 〈畠山記念館蔵〉

15 妙法蓮華經囑累品第二十二

16 この品のこ、ろはほとけ法座よりたちて
17 大神力を現して右の御手をもちて無量
18 の菩薩摩訶薩の頂をなて、のたまはくわ
19 れ無量百千万億阿僧祇劫にこのえかたき
20 阿耨多羅三藐三菩提の法をならへりい
21 まもてなんたちにふそくすなんたちま
22 さに一心にこの法をひろめてひろく
23 利益すへしかくのことく三たひもろく
24 の菩薩摩訶薩の頂をなて、このことはを
25 なしていはくわれ無量百千万億阿僧祇
26 劫にこのえかたき阿耨多羅三藐三菩提の
27 法をならへりいまもてなむちに付嘱す
28 なむたちまさに受持読誦してひろく

に、こ、ろをひとつにして、持受読誦解説書写し、説のことく修行すへし。所在の
国土に、もし、持受読誦解説書写し、説のことく修行することあらん、もしは、
経巻所住のところ、もしはその

のなか（にしてもあれ、もしは、はやしのなかにしてもあれ）もしは、樹下（にし
てもあれ）、もしは僧房（にしてもあれ）、もしは白衣

舎（にもあれ）、もしは、殿堂（にありてもあれ）、もしは、山谷曠野にもあれ、
（このなかに）みな、塔をたては供養すへし。（ゆへはいかん。まさにしるへし。）こ
のところは（すなはち、これ）、

道場なり。諸仏、ここにして、阿耨（多羅三藐三）菩提をえ
たまふ。諸仏、ここ

にして、法輪を転し（たまふ。）諸仏、ここにして、（般）涅槃
したまふ。」

〈妙一本 一二三・一〇一三〇・一〉

（そのときに、釈迦牟尼）仏、法座よりたちて、
大神力を現し（たまふ。）みきのみてをもて、無量
の菩薩摩訶薩のいたたきをなてて、この言をなしたまはく「わ
れ、無量無辺百千万億阿僧祇劫に、このえかたき
阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。い
まもて、なんたちに付属す。なんたちま
さに、こころをひとつにして、この法を流布し、ひろく
増益せしむへし。」かくのことく、みたひ、もろもろ
の菩薩摩訶薩のいたたきをなてて、この言を
なしたまはく、「われ、無量百千万億阿僧祇
劫に、このえかたき、阿耨多羅三藐三菩提の
法を修習せり。いまもて、なんたちに付嘱す
なんたち、まさに、受持読誦し、ひろく

29 この法をひろめて一切衆生をしてあ
 30 まねく聞事をえしむへしゆへいかん
 31 なれは如来に大慈悲まします諸のを
 32 をしむ心なし又おそるることなし
 33 よく衆生に仏の智慧如来の智慧自然
 34 の智慧をあたふ如来はこれ一切衆生の
 35 施主なりなむたちまたしたかひて
 36 如来の法をまなひておしむ心なれ
 37 未来世においてもし善男子善女人
 38 ありて如来の智慧を信せん者にはまさ
 39 にために此法華経をときて聞ことを
 40 えしむへし其人をして仏恵をえし
 41 めむかためのゆへ也若信せざらんものには
 42 まさに如来の余ふかきのりの中にお
 43 いてをしへよろこはしむへし若
 44 よくかくのことにきするはなはちすて
 45 に諸仏の恩を報する也時に諸の菩薩
 46 ほとけのこの説をき、てみな大に歡喜
 47 してますく身をまけかうへをたれ
 48 たなこゝろをあはせて仏に申て申
 49 さく世尊の勅のことくまさにをこな
 50 ふへしねかはくはほとけおほつかなく
 51 な思食そ諸の菩薩かくのことに三度
 52 世尊の仰のことくまさにをこなふ
 53 へし願は仏おほつかなくおほし
 54 めしそと申す

この法をのへて一切衆生をしてあ
 まねく聞知することえしむへし。ゆへはいかん。
 如来は、大慈悲まします。もろくの慳
 慳なく、また、おそるるところなし。
 よく衆生に仏の智慧・如来の智慧・自然
 の智慧をあたへ（たまふ）如来はこれ、一切衆生の
 施主なり。なんたち、またしたかひて、
 如来の法を学すへし。慳慳をなすことなかれ。
 未来世に、もし、善男子・善女人
 の、如来の智慧を信するあらは、まさ
 に、ためにこの法華経を演説して、聞
 知することえしむへし。そのひとをして、仏恵をえし
 めんかためのゆへなり。もし、衆生の信受せざるあらは
 まさに、如来の余の深法のなかにを
 きて、示教利喜すへし。もし（なんたち）
 よく、かくのことにくせは、すなはち、すて
 に、諸仏の恩を、報したてまつるとす。」ときに、もろくの菩薩
 （摩訶薩）、ほとけの、この説（をなしたまふ）を、きき（をはり）て、みな、おほき
 なる歡喜、
 （そのみに遍満しぬ。）ますます（恭敬をくはへて）みをまけ、かうへをたれ、
 たなこゝろをあはせ、ほとけに（むかひたてつまりて、ともにこゑをおこして）まう
 さく、「世尊の勅のことく、まさに（つふさに）奉行
 すへし。（たたししかなり。）世尊、ねかはくは、うらおもふたまふこと
 ましませされ。」もろくの菩薩（摩訶薩衆）、かくのく、三反、
 （ともにこゑをおこして、まうさく）「世尊の勅のことく、まさにつふさに奉行す
 へし。（たたししかなり。世尊、ねかはくは、うらおもふたまふ
 ことましまさされ。）」

〔囑累品第二十二・承前〕〔香雪美術館蔵〕

〔妙一本 一一三〇・五〕一三三・五〕

55 時に釈迦牟尼仏十方よりきたれる

(その)ときに、釈迦牟尼仏、十方よりきたり(たまへる)

56 諸の分身の仏をのく本土にかへりて

もろもろの分身のほとけ(をして)、をのおの本土にかへら(しめたまはんとし)て、

57 しかもこのことはをなしていはいく

この言をなしたまはく、

58 諸仏おのくまします所にしたかひて

諸仏、おのをの、所安にしたかひ(たまへ)。

59 多宝仏塔かへりてもとのことくなるへし

多宝仏塔、かへりて、もとのことくましますへし。』

60 このことはを説給とき十方無量の分身

この語をときたまふとき、十方の無量の分身

61 の諸仏の宝樹下の師子の座の上に坐し

の諸仏の、宝樹下の、師子の座のうへに坐し

62 給ならひに多宝仏上行等の无邊阿僧祇

たまへるもの、および、多宝仏(あはせて)上行等の、無量阿僧祇

63 の菩薩大衆舍利弗等声聞四衆および一

の菩薩大衆、舍利弗等の声聞四衆、をよひ一

64 切の世間天人阿修羅等仏の説をき、

切の世間・天人・阿修羅等、仏の(所)説をきき

〔漢文原典〕

(如来神力品 1314)

爾時佛告上行等菩薩大衆 諸佛神力如是無量無邊不可思議 若我〓以是神力 於無量無邊百千萬億阿僧祇劫 爲 囑累故〓説此經功德 猶不

能盡〓以要言之如來〓一切所有之法 如來一切自在神力 如來一切秘要之藏 如來一甚深 之事皆〓於此經經示顯説是故汝等於如來滅後

應當一心受持誦誦説書寫 如説修行所在国土 若有受持誦誦説書寫 如説修行 若經卷所住之處処 若於園中若於林〓中若於樹下 若於

僧坊若白衣〓舍 若在殿堂 若山谷曠野〓 是中皆 應起塔供養 所以者何 當知是處 即是〓道場 諸佛於此 得阿耨多羅三藐三菩提〓

諸佛於此轉於法輪 諸佛於 此而〓般涅槃

〔岩波文庫「法華経・下」二五八―一六〇頁〕

(囑累品 16554)

爾時釈迦牟尼佛 從法座起〓現大神力 以右手摩無量〓菩薩摩訶薩頂 而作是言 我〓於無量無邊百千萬億阿僧祇劫〓修習是難得阿耨多羅三

藐三菩提法 今〓以付囑汝等 汝等應當一心流布此法 廣〓令增益 如是三摩諸〓菩薩摩訶薩頂 而作是言〓 我於無量百千萬億阿僧祇

劫 修習是難得阿耨多羅三藐三菩提〓法 今以付囑汝等〓汝等 應當受持誦誦廣〓宣此法 令一切衆生〓普得聞知 所以者何〓如來有大慈

悲 無諸慳〓慳 亦無所畏〓能與與衆生佛之智 慧如來智慧自然〓智慧 如來是一切衆生之大〓施主 汝等亦應隨〓學如來之法 勿生慳慳〓

於未來世 若有善男子善女人〓信如來智慧者 當〓爲説此法華經 使得聞〓知 爲其人得佛慧〓故 若有衆生不信受者〓當於如來餘深法中〓

示教利喜 汝等若〓能如是則爲已〓報諸佛之恩 時菩薩摩訶薩〓聞佛作是説已 皆大歡喜〓遍滿滿其身益加恭敬曲躬低頭〓合掌向佛俱發聲言

如世尊勅當具奉行 唯然世尊願不〓有慮諸菩薩摩訶薩衆 如是三反〓俱發聲如世尊勅當具奉行 唯然世尊〓願不有慮

(囑累品 55〜65)

爾時釈迦牟尼佛 令十方来／諸分身各佛還本土／而作是言／諸佛各隨所安／多寶佛塔還可如故／說是語時 十方 無量分身／諸佛坐寶樹下師子座上／者及多寶佛并上行等無辺阿僧祇／菩薩大衆 舍利佛等聲聞四衆 及一／切世間天 人阿修羅等 聞佛所説／皆大歡喜

(岩波文庫『法華經・下』一六六―一六八頁)

右に見る「詞書」と仮名書きの經文(「妙一本」との異同は次のように整理される。

① 冗長な經文が随所で簡略化されている。

特に7〜8行の間では、經卷尊重の趣旨が損なわれない範囲で大幅な省略が行われている。8〜10行の間では「もし」で導かれ「に(して)もあれ」で受ける文型の後半が省略され、簡略化されている。

② 文章・文脈が単純、平明に改められている。

經文「ゆへはいかん。まさにしるへし。……(10)」の措辞によって導かれる文は、詞書では文末に「……かゆへなり(14)」と簡明に理由を示す語句を補うことによって一読して文意が理解できる文に改められている。

③ 長大な語句・表現が短小な語句・表現に改められている

18 のたまはく この言をなしたまはく
36 おしむ心なかれ 慍悵をなすことなかれ
46 この説(を) この説をなしたまふ(を)
46 大に歡喜して… おほきなる歡喜、その身に遍満しぬ

④ 漢字連語の一部が省略されている。

2 無量阿僧祇劫 無量(無辺百千万)阿僧祇劫
11 阿耨菩提 阿耨(多羅三藐三)菩提

16 仏 (釈迦牟尼) 仏
45・51 菩薩 菩薩(摩訶薩)
13 涅槃 (般) 涅槃
64 説 (所) 説

⑤ 読み添えの敬語が省略されている。

7 此經にときあらはす この經にをきて宣示顯説し(たまふ)
13 法輪を転し 法輪を転し(たまふ)
17 大神力を現し 大神力を現し(たまふ)
34 自然の智慧をあたふ 自然の智慧をあたへ(たまふ)
45 諸佛の恩を報する也 諸佛の恩を報し(たてまつる)
46 ほとけのこの説 ほとけのこの説を(なしたまふ)

55 十方よりきたれる諸の分身の佛 十方よりきたり(たまへ)
57 このことはをなしていはく るもろの分身のほとけ
57 もとのことくなるへし この言をなし(たまは)く
57 まします所にしたかひて もとのことくましますへし
58 佛の説をき、 佛の説をき(たまへ)て
64 音説語が平易な和語に改められている。 39 ときて 演説して

20・27	ならへり	修習せり	42	ふかきのり	深法
22	ひろめて	流布し	43	をしへよろこはしむ	
30・36	聞事	聞知すること			教利喜す
32	をしむ心	慳恪	49・52	をこなふ	奉行す
36	まなひ	学す	58	まします所	所安

右に見るように詞書は全体的に文の簡略化、語句の省略、語句の平易化によって、平易かつ簡要に經典の内容を伝えるものになっているが、文脈、語順は漢文原典そのままに保存されて乱れるところがない。これは依拠すべき訓読の先行資料が存在し、これに基づいてリライトしたためと考えられる。絵巻の絵画的側面については、其の画面構成に既存の法華経絵の図様を利用して絵巻の特色を生かそうとした工夫が窺えるというが、同様に詞書については当時流行していた仮名書き法華経が利用されたことは極めて自然なことであろうと思われる。

詞書が仮名書き法華経に依拠したことは細部においても指摘される。「仰(49・52)」の字が原典の「勅(おほせ)」の語に当てられているのは、いちど訓読され仮名書きされた語が転写の間に同訓異字に書き換えられるという、仮名書き資料の伝本間にしばしば生じる事例を窺わせる。同様に「所(7)」は原典の「処」に、「家(9)」は原典の「白衣(舎)」に当てられた同訓異字と考えられる。

また、部分的には次のような原典を逐語的に訓読した文体も見られるが、これはそのまま仮名書き法華経の行き方である。

この法をひろめて一切衆生をしてあまなく聞事をえしむへし (30・31)

若よくかくのごとくするはすなはちすてに諸仏の恩を報する也 (43・45)

さらに、妙一本との比較において異同のある点については別系統の

訓みを伝える伝本(瑞光寺本)と一致するものが見られる。次にその幾つかをあげる。

〔1〕「しかも(而)」(57)は妙一本では不説であるが、瑞光寺本には同様に訓まれている。

〔2〕「所以者何」は、二様の訓みが行われている語句であるが、詞書は瑞光寺本と同様に訓まれている。

ゆへいかなとなれば (30)

ゆへいかなとなれば (瑞光寺本二十二 17)

ゆへいかな (妙一本1126・1)

〔3〕「有善男子善女人信如来智恵者」の訓読。

善男子善女人ありて如来の智恵を信せん者 (38)

善男子善女人ありて如来の智恵を信せん者 (瑞光寺本二十二・23)

善男子善女の、如来の智恵を信するあらは (妙一本1127・2)

〔有〕を含む構文ではしばしば二様の訓読が行われ、従って二様の語順の和文が生まれるケースがあり、訓読の系統を分かつ指標の一つになっているが、この場合も詞書は瑞光寺本と同様な訓法によっている。

〔4〕音読語が平易に訓読(和語化)されているものは一部、妙一本の左訓と一致するもの「ならへり(修習)」を「しへよろこはしむ(示教利喜)」を「こなふ(奉行)」もあるが、その他については他に依るべき資料のあったことが充分、想像されるのである。

このように詞書の背後に仮名書き法華経があったことは疑う余地がない。絵巻の諸解説はいずれも、「詞書」については経文の平易な和訳であることを述べるが、もとより漢文原典から直接に和訳されたものではあり得ない。

次にこの絵巻が現存する「神力品」「囑累品」の二品のみのものであったかという問題を考えてみたい。法華經には四要品をはじめ、平安朝女流文学にしばしば現れる「提婆達多品」等、伝統的に重要視されてきた諸品がある。法華經各品への関心度を知る一つの目安として「釈教歌」が考えられるが、島地大等編『漢和对照妙法蓮華經』付載の「法華經歌集」に見ると、「四要品」と並んで「提婆達多品」に関する作品が目立って多い。また、『梁塵秘抄』の法華經法文歌について調査した結果では、次の順序に多いという。^(注10)

- 法華經歌 …… ①如來寿量品 ②提婆達多品 ③方便品第二
法文歌 …… ①提婆達多品 ②方便品第二 ③如來寿量品

これらを考慮すると「神力品」「囑累品」の二品だけが特に選ばれて絵巻化されたとは考えにくい。また「囑累品第二十二」の題目の掲出の仕方、および冒頭（「神力品」は冒頭部分の本文欠）の「この品のこゝろは……（16）」という措辞は、同様な形式で他品が並存していたことを示すものであると解される。絵巻の原初の姿は、八巻二十八品であったと考えられる。（なお、法華十講などの例から推すと法華經八巻に開經「無量義經」と結經「觀普賢經」を加えた十巻仕立ての可能性も考えられるが、開結の二經についても仮名書き資料の遺存が知られている。）

また、「神力品」「囑累品」は法華經二十八品の中では最も短小な部類であり、これに数倍〜十倍する長大な品々がある。従って、絵巻の全体は相当に長大であった筈であるが、絵巻の規模としては類例の範囲内であるという。^(注11)

詞書も又、相応に長大に及んだ筈であり、この点からも詞書が漢文原典から直接に和訳されたことは考えにくい。各品の詞書には、当然、「神力品」「囑累品」の如くに「仮名書き法華經」を簡約したものが想定されるが、それ等は合わせて、いわば「簡約仮名書き法華經」とも

言うべきものを成したに違いない。

四 結 論

この「翻訳仮名書き法華經」および「簡約仮名書き法華經」は、これまでによく知られているいわゆる訓經の「仮名書き法華經」とはその形態と作成動機を異にした別個の資料として区別されるべきものである。

「訓經」は読經が漢文原典の音読によらず、取意・理解を兼ねた訓読によって行われたことに始まる。「説誦」は經典、特に法華經が説く五種の功德の行——受持・説・誦・書写・解説^{げせう}——の一つであった。法華信仰の隆盛の世に「説誦」のテキストとして「訓經」が求められたことは十分に理由のあることであった。遺存資料のなかに漢文原典から離れた表音的な表記が目立つもののあることはこれらが説誦（さらには斉唱）のテキストとして用いられたものであったことを物語る。「訓經」の説誦（斉唱）はまた、訓読の日本語が広く人々の口頭にのぼる機会でもあったに違いない。

「訓經」が「説誦」の用途のために作成され存在したのに対し、經典の内容を人々に知らしめる「解説^{げせう}」のために作成されたのが「翻訳仮名書き法華經」および「簡約仮名書き法華經」であると解される。

訓読は漢文原典の構文・語句に寄りかかった、いわば特殊な翻訳である。それ故に「訓經」は逐語的な読みの延べ書きの形であった。これに対して「翻訳仮名書き法華經」の《資料A》《資料B》は漢文原典の構文・語句と絶縁した別個な独立した文文章である。例えば《資料A》の「そのしるしのおほきさひ（と）」のあしのかけにまかひてみゆるちりひとつかおほきさなり（大如微塵）は全て和語を用いて經文の意を平明に敷衍して述べ換えている。《資料B》の「もしした

のさきらをもて(「若以舌根」)は「舌根」という固い仏教漢語を平易な和語「したのさきら」と言い換えている。これらのことは随所に認められ、いずれも經典内容を平易に伝え知らしめることを目的としたものである。即ち、法華經の説く「解説」のための行為である。この二片の残簡は「訓經」とは別の次元の「翻訳經典」が存在したことを示す小さいが確かな証拠である。

絵巻の詞書もまた經典の内容を要領よく伝えることを目的としたものである。本来、經典絵巻は經典を庶衆に近づけ知らしめることを意図して作製されたものであり、これもまた「解説」の行に根ざす行為に他ならない。ここでは經典の世界の視覚的な理解と同時に經典内容の簡明な紹介が工夫された。この目的に沿った詞書は、經典に特有な冗漫な表現を要約し、煩瑣な内容を整理し、馴染みにくい漢語を和語に言い換えるなどの工夫がなされたのである。その結果、詞書は漢文原典に忠実なるがゆえに馴染みにくく生硬な「訓經」から離れ、より自然な日本語にあゆみ寄るものとなった。このようにして「簡約仮名書き法華經」が誕生し存在したのである。

法華信仰の盛んな時代に法華經が世に流布、浸透した姿として三種の形態があり、其々が文献資料として跡をとどめている。即ち、一つには「読誦」のためのテキストとして「訓經」が作成され、遺存資料も多い。現在、一般に「仮名書き法華經」として広く知られているものはこれに当たる。また、法華經を人々に伝え知らしめる功德——「解説」の行——として「翻訳經」および「簡約仮名書き法華經」が作成された。「翻訳仮名書き法華經」は残簡に跡をとどめ、「簡約仮名書き法華經」は法華經絵巻のなかに見られる。

「訓經」は浄土教典にもその例があり、他の經典絵巻にもまた仮名書きの詞書をもつものが見られる。そのなかにあつて、法華經が和語・和文の「翻訳經典」として存在したことは特筆されなければならない。

さらに「翻訳經典」の全巻が作成された可能性を考えると、その国語資料としての意味は測り難く、一經典が翻訳として日本社会に流布、浸透したことの歴史的意義もまた測り難く大きい。

注

- (注1) 中田祝夫編『仮名書き観無量寿經・阿弥陀經(影印・解説)』(勉誠社・平成3)
- (注2) 中田祝夫「妙一記念館本仮名書き法華經略解題」(中田祝夫編『妙一記念館本仮名書き法華經(影印編・下)』(佛之世界社・昭和63))
- (注3) 野沢勝夫「仮名書き法華經研究序説(資料編)」(勉誠出版・平成18)
- (注4) 江戸期に書写成立した資料であるが、前期との関係が深い二書、および江戸期の資料で刊行されている一書をあげておく。
- (1)『月方瀬本仮名書き法華經』(写本、全八冊。江戸初期の書写。中田祝夫博士蔵。拙著に一部翻字、紹介)
- (2) 木村晟他編『西来寺本仮名書き法華經(影印編)』(陵伽林・平成5)
- 萩原義雄編『西来寺本仮名書き法華經(翻字編)』(勉誠社・平成6)
- (3) 田嶋毓堂編『校成図書館藏法華經和歌付き仮名書き法華經の研究(影印編)』(名古屋大学文学部日本文学日本語学研究室・一九九八年)
- (注5) 小松茂美編『古筆学大成25』(講談社・一九九三) 三二八頁
- (注6) 小松茂美編『古筆学大成25』(講談社・一九九三) 三二二頁
- (注7) 松原 茂「經典絵巻の種々相」(『続日本絵巻大成10』中央公論社・昭和59)
- (注8) 田中一松「法華經絵巻について」(『國華』六八四号・昭和24)
- (注9) (注7)に同じ
- (注10) 高木 豊『平安時代法華仏教史研究』(平楽寺書店・昭和48)
- (注11) 宮 次男「法華經絵巻について」(『新修日本絵巻物全集第25巻』角川書店・昭和54)